

2011年、平成23年もあとひと月となりました。職員、生徒、一人一人が自分の確かな節目を作るべく1年頑張ってきました。1年という時間では叶わぬ課題もありますが、それぞれが一步でも前進しようと形に残して歩き続けてきました。特に3年生は、「合格」という形で、3年間の総決算を果たした人もいます。しかし、多くの生徒はこれからのチャレンジ、努力で夢をかなえようともがいています。私たち職員は、その実現への強力なサポーターとなるべくまた奮闘したいと思います。1年間、唐津西高への応援ありがとうございました。

◆◆◆◆ 特集：「被災地石巻を訪ねて—〈復興と傷痕〉という現実」について ◆◆◆◆

3月の東日本大震災から、早くも9か月が経とうとしています。本校と震災の関わりについては「校長室から」の4月・5月・9月・10月の各号で取り上げてきました。取り上げてはきたものの、報道での記事等も他の重大事に取り紛れてスペース的には少なくなっているというのが現実であり、まして東日本から遠く離れている九州においては、実感が薄らいでいるというのもまた現実なのです。しかし、平成23年3月11日午後2時46分に太平洋三陸沖の深さ約24キロを震源としてマグニチュード9.0の大地震が発生し、続いて短時間で東北地方から関東地方までの海岸線を大津波のうねりが襲い掛かり、死者1万5,840人、行方不明3,607人（11月28日現在）を出したという「現実」が重く横たわっています。その現実を、報道等からの間接的な受容ではなく、自分の眼で、自分の耳で確かめたいと思い、11月22日・23日に宮城県の東松島高校と石巻市の鈴木君の仮設住宅を訪れました。東松島高校の渋谷校長先生と東松島高校1年の鈴木君とはご縁があり（*9月号参照）、雪が降り積もる前という思いで、出かけました。訪問で見聞きした全てを書き連ねることはできませんが、特に心に残ったことを記します。



▶心に残った風景

1 東松島高校で

学校は地震の被害で校舎内部に亀裂が入ったりしたもの、津波は駐車場が水浸した程度で済んだようですが、校長先生が講堂を案内していただいた時、長く「死体安置所」になったと伺いました。多くの方の無念さや空しさが詰まった空間でした。

2 石巻の中心地で

ホテルは駅から近く、アーケード街にも道1本隔てたところでした。アーケードではシャッターを下ろした店が半分以上あり、中にはまだ大地震のまま崩れた家屋もあり、復興まであと何年かかるのだろうと推測すら立たない現実が横たわっていました。

3 仮設住宅に向かう途中で

2日目朝、車で迎えに来ていただき、途中、街中から港、幹線道路、住宅まで、車窓越しで被災状況の説明と、お母さんの視点から見た感想をお聞きました。8か月たつてがれきの山は片づけてある場所が多いものの、ただっ広い平地で、昔ここで生活を営んでいたという事実を全く拒否するかのような今の風景と、津波と火災で焼け焦がれた小学校の廃墟が印象的でした。

4 仮設住宅の鈴木家宅で

プレハブの長屋で、部屋は狭く、生活するには不十分でしたが、各地から見知らぬ方が入居していても、空き地で野菜を助け合いながら作ったり、新しい生活を支えあっている様子でした。近づく冬を前に、断熱材の補強や、二重サッシの取り付けなどに余念なく工事が行われていました。

▶心に残った言葉

1 お母さんの言葉

「頑張ってください」。激励の言葉とはよくわかっているが、何をどう頑張ればいいのか、全く分からずにその日その日を暮らしていたということでした。言葉の重みを感じさせるお話でした。言葉は励ましにも、叱咤にもなるということでしょうか。

2 お父さんの言葉

「ここ（仮設住宅の自宅）は津波が来ないのでいいです」。石巻中心部から車で20分ぐらい離れていますが、命の危険性を考えずに安心して暮らせるという実感が込められた言葉でした。体験された津波の恐怖や暴威が感じられる言葉でした。

今回の旅には、デジカメも持参しましたが、上記の2枚しか撮りませんでした。「撮れなかった」という表現が正しいのです。亡くなった方の魂が残る場所で、不謹慎に撮れないという思いでした。その分、心に確かに刻み込んできました。これから私達に求められるのは、「3・11を忘れない」という気持ちを持ち続け、自分なりの支援の形で表し続けていくことだと思います。来年5月のハナコフェア—の命の講演では、鈴木君のお母さんにお話をさせていただきようお願ひしてきてきました。是非、命と真剣に真向かった心からの話を聞きに来てください。